

からむし織
が
出来るまで



●からむし焼き



●からむしの刈り取り

雪深い昭和村が遅い春を迎え、芽吹きで山々が青く色づいた五月下旬、からむし畑は焼畑でその一年が始まります。

畑を焼いて肥料をまき、からむしは芽を出しますが、繊維の質を落とさないために、化学肥料はいっさい用いられません。

夏の盛りまでからむしはグングンと成長し、人の背丈を越える七月下旬ころから手作業による刈り取りが行われます。刈り取られたからむしは清水に浸けられ芋引きという作業で繊維を残し、これを乾燥させます。乾燥したからむしを指で裂いて一本づつ糸に紡いでいくのが芋績みと呼ばれる作業。根気を要する作業で、反物一反分を紡ぐのに50日はかかるのです。

こうしてできた糸は織り上げられ、染められてようやく一反が完成するのですが、この加工作業は村の女性の手によって受け継がれてきたのです。



●芋績み



●よりかけ

「からむし織」二度身につけたら 忘れられない快適さ

「からむし織」は苧麻と呼ばれる植物の茎を加工することによってみだされる繊維を織物にしたものです。原始織物ともいわれるほどその歴史は古く、奈良時代にもさかのぼるといわれています。苧麻が麻の分類に入るので

は字を見てもわかるとおり、その繊維としての品質は、化学繊維では決して模倣できない特性をもっているのです。

吸湿性に富み、しなやかな肌ざわりでまといつくこの繊維は、高温多湿な夏にびつたりの素材です。

この栽培から加工までの一連の工程は、すべて手作業にたのむしかなく、一反を仕上げるの

に数ヶ月を要することからも、からむし織を貴重で大変高価なものにしている要因ですが、一度身につけたら忘れることのできない快適さをもたらしてくれる織物なのです。

家々に響くからむしを織る音は、平成八年に「日本音風景100選」にも選ばれ、昭和村を代表する伝統産業となつていきます。



◆からむし織製品

◆からむし織の里フェア 村の特産品であるからむし織を、多くの人々に広く知ってもらおうとはじめたイベントで、からむし織の見学や体験ができます。

